

めぐみイエス・キリスト教会

2022年2月20日(日)第三主日礼拝
週報「通算第596号」



2022年標題聖句

第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】		
【賛美Ⅰ】	新聖歌358「神なく望みなく」	p. 572
【交読文】	No.16 詩篇第42篇	p. 891
【賛美Ⅱ】	新聖歌428「キリストには代えられません」	p. 690
【使徒信条】		
【主の祈り】		
【先週説教】		
【賛美Ⅲ】	オリジナル曲No.20「神の国となる為に」	
【聖書朗読】	使徒の働き15章1節～6節(新約p. 264下段)	
【礼拝説教】	《第一回エルサレム教会会議》	
【聖餐式】		
【賛美Ⅳ】	新聖歌165「栄光イエスにあれ」	p. 235
【平和祈り】		
【頌 栄】	新聖歌63 「父・御子・御霊の」	p. 85
【祝祷後奏】		

※本日の聖書箇所(使徒の働き15章1節～6節)

15:1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。

15:2 それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。

15:3 こうして彼らは教会の人々に送り出され、フェニキアとサマリアを通過して行った。道々、異邦人の回心について詳しく伝えたので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。

15:4 エルサレムに着くと、彼らは教会の人々と使徒たちと長老たちに迎えられた。それで、神が彼らとともにいて行われたことをすべて報告した。

15:5 ところが、パリサイ派の者で信者になった人たちが立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである」と言った。

15:6 そこで使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。

●ポイント1.「エルサレム行きの詳細」とは？

※ガラテヤ人への手紙2章1節～14節「パウロの証から」(新約p.375下段)

●ポイント2.「主イエスの言われた律法の意味」とは？

※マタイの福音書22章35節～40節「主イエスの教えから」(新約p.370)

22:35 そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。

22:36 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」

22:37 イエスは彼に言われた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』」

22:38 これが、重要な第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。

22:40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

※ヨハネの福音書13章34節前半「主イエスの新しい命令」(新約p.213)

「私はあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。」

●ポイント3. すべては恵みのゆえに

※エペソ人への手紙2章8節～9節「使徒パウロの勧めから」(新約p.386)

2:8 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。

2:9 行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。

◎先週の礼拝メッセージの概要【第一次伝道旅行の終えて】

《さて、リステラにおいてパウロとバルナバが伝道していますと、何とピシディアのアンティオキアとイコニオンから、二人に反対するユダヤ人たちがやって来たのです。そして、パウロだけが彼らに見つかってしまい、石打ちの刑が行なわれたのです。しかし、このことも神様のご計画であったと思われまます。かつてサウロであった時、彼はステパノの石打ちの刑を目撃しています。サウロは、石を投げる者たちの上着の番をしていました。またステパノを殺すことに賛成していたのです。今回は何と、まったく真逆の立場に立たされたわけです。死んだと思われたパウロは、町の外に引きずり出されます。この時パウロは本当に死んで、生き返ったのです。『私は誇っても無益ですが、主の幻と啓示の話に入りましょう。私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に、第三の天にまで引き上げられました。』と、コリント書には、証しを書き記されています。

彼は「第三の天」において、主イエス様に出会ったに違いありません。そしてこの時に、パウロは主から多くの啓示を授かったと思われまます。それ故、この後に書かれる書簡には、様々の奥義が書き記されたのです。

また、パウロの書簡は、ルカあるいはマルコが代筆したと伝えられています。パウロが自筆にて最後のあいさつ文を書いています。なぜ、全文をパウロ自身が書かないのでしょうか。それは、この時の石打ちの刑により、顔に目に大きな傷を負ったからではないでしょうか。さて、弟子たちが囲んで見ている間にパウロは立ち上がります。そして、デルベで伝道し、迫害を受けたリステラ、イコニオン、ピシディアのアンティオキアへと引き返して、彼らの為に、教会ごとに長老たちを選んだとあります。それからペルゲを経て、港町アタリヤからシリアのアンティオキアに戻って行きました。ここから彼らは遣わされたからです。こうして、多くの実を得た第一次伝道旅行が終わりました。しばらく二人は、アンティオキアの教会に留まることとなります。しかし、大きな問題が起こり始めていたのです。》

◎お知らせ

※次回礼拝は2月27日(日)教会にて行ないまます。また5月29日(日)・7月31日(日)・10月30日(日)の第五主日は、特別メッセージを語ります。